日本行動計量学会会報
第39号
1986年7月30日
日本行動計量学会
運営委員会広報係
（〒106）東京都港区
南麻布4－6－7
統計数理研究所内

〈巻頭言〉

文化の行動計量

三隅二不二

これほど国際関係が身近になってくると、好むと好まざるとに拘らず、文化の計量を考えざるをえなくなる。三十年来、実験社会心理学としてのグループ・ダイナミックスを研究してきたが、卒直に述べて、あまり文化の相違について真剣に考えてこなかったことを反省する。

実験結果に、米国などの研究と相違が見出されたならば、それを文化差と考えるよりも、実験状況を構成する条件差として考えてきた。条件差のなかには文化的要因も含まれているかも知れないが、それは部分的影響であると考えてきた。一方、文化人類学や文化心理学では、いうまでもなく文化の特殊相を記述し、解釈してきた。中根、土居の日本社会論や日本人論は、その特殊相のみを強調している。

両者の視座は一度再吟味しておかねばなるまい。それは、ともに方法論の問題である。

概念と方法の適用に関する再吟味の問題である。概念化の問題としては、従来の社会科学の分類それ自体に問題がある。政治・行政・宗教・教育・体育などの分類それ自体が社会的現象の特殊相に相即したものであって、物理学・生理学のような社会科学の分野における一般学のカテゴリーが存在しないようである。私どもは、リーダーシップ現象の行動計量を進めているうちに学際現象の〝広場〟としての一般学としてのリーダーシップ論がおちつく先がないことを知った。政治のリーダーシップは、行政的リーダーシップとも、経営リーダーシップとも、教育のリーダーシップとも異なる。お互いに異なることだけを論議して、それらを相互にすり合せて、類同性を体系化する分野が存在しないのである。データの分析においても、一般性、普遍性と特殊性の双方を同一のデータから解析する視点に欠けている場合が少なくない。日本人論の行詰まりの一つもそこにあるだろう。中根、土居の論文を読んで感じることは、どこまでが普遍的なもので、どこから日本的なのか、はっきりしないのである。日本型集団主義の論議においても同様である。アメリカ人は個人主義、日本人は集団主義という観点から、スケールを準備して永年データを収集して分析してみたが、結果ははっきりしない。英国・米国と日本における同様な工場・生産工程の職場の管理・監督者を対象としてリーダーシップ行動評定を行っているが、予想以上に対人関係に対する配慮因子に関して類似性が存在することに驚いている。もっと異なるはずだというAssumptionがあったためかも知れない。

比較対象となる資格をもったものは〝同じようで異なるもの〟であるという林知己夫のことばは示唆的である。全く同じもの、全く異なるものは比較対象となる資格がない。文化の比較の場合、サルと人間の類似性すら追求する人間科学の世界では、同じようなものが多く、文化差といっても、それは少しばかり違うのではないか。それにも拘らず、最初からちがったものであるという〝おもいこみ〟が強すぎるのではないか。文化の行動計量学は、まだこれからである。

みすみ・じゅうじ
日本行動計量学会・理事
大阪大学人間科学部教授

会議記録

○理事会
時　昭和六十一年六月五日
所　統計数理研究所
出席者　理事十一名

1. 学会賞選考委員会の第一回会合が五月三十一日に開催され、選考が進められていることが報告された。
2. 第14回大会の準備が進んでいることが古川理事（第14回大会実行委員会）より報告された。
3. 日本学術会議・行動科学研究連絡会議の主催するシンポジウム「行動科学に期待するもの」（昭和六十一年八月二十八日開催予定）の講演に林理事長が参加することを決定した（本会報三ページを参照のこと）。

○理事会
時　昭和六十一年七月十八日
所　統計数理研究所
出席者　理事十一名

1. 学会賞選考委員会の京極委員長より本年度の学会賞授賞者の選考過程の説明があり、功績賞（高根芳雄氏）優秀賞（富山慶典氏、永岡慶三氏）の授賞を原案通り承認した。
2. 各種委員会の報告があった。和文誌14巻1号は十一月中旬に完成の見込みです。欧文誌No. 20は十一月下旬に完成の見込みです。No. 21は六十二年三月中に完成の予定です。
3. 講習会、月例シンポジウムの計画の説明があった。

○運営委員会
時　昭和六十一年七月三日
所　統計数理研究所
出席者　運営委員　七名

1. 夏季セミナーの企画は運営上の理由により中止し、かわって講習会を開くこととした。
2. 月例シンポジウムを「社会調査とプライバシー」の題目で開催できる旨の報告があった。
3. 会報記事その他を検討した。

第一回学会賞授賞者、決定

会議の記録にもあるように昭和六十一年度の学会賞は左記の会員に授賞されます。

功績賞　高根芳雄氏（マギル大学）
優秀賞　富山慶典氏（筑波大学）
　　永岡慶三氏（神戸大学）

八月二十六日の総会中に授賞を行いますので、多数の会員の方々の御参集を期待しております。

会合記録

第41回月例シンポジウム
テーマ『日本人研究のあり方』
日時　昭和六十一年二月一日
場所　統計数理研究所
オーガナイザー　林知己夫
発表者　穐山貞登・原忠彦・河野裕明・鈴木達三・衛藤藩吉・河竹登志夫
参加者　四十五名

第42回月例シンポジウム
テーマ『三相データの解析方法』
日時　昭和六十一年二月七日
場所　統計数理研究所
オーガナイザー　宮埜寿夫
発表者　P・クローネンベルク、村上隆・岡太彬訓・犬飼幸男
参加者　三十九名

日本行動計量学会 第14回大会 近づく

本年度の大会が近づきました。場所・日程・企画は左記の通りです。

会場　東京大学経済学部
　　（東京都文京区本郷）
期日　昭和六十一年
　　八月二十五日（月）から
　　八月二十七日（水）まで

《企画》

○シンポジウム・1
『研究領域によって
　統計モデルはどう違うか』
　分野　医学、薬学、農学など

○シンポジウム・2
『空間量モデル』
　分野　医療、世論調査など

○ナイトセッション・1
『調査技術と
　統計論のあつれき』
　分野　調査理論、調査環境、官庁統計、調査権など

○ナイトセッション・2
『モデルの流行と偏向』
　分野　説明と予測、個人と集団、あいまい理論など

○招待講演
『分子レベルの集団遺伝学』
　講演・太田朋子（遺伝研）
のほか、2件の講演を予定

右のうち「ナイトセッション」は新しい企画で、夕刻五時以降に開かれるものです。これをふくめて盛りだくさんの企画が立てられています。

▲▲▲　多数の御参加を　▲▲▲

研究会・シンポジウムの情報

○サマーセミナーは中止

前号「会報」（38号）で予告しました、第2回サマーセミナーは日程・運営準備の都合により中止のやむなきに至りました。御予定に入れて下さっていた会員各位には心からおわび申上げます。

これに代わる企画として、

○講習会を企画します。

以前から好評な講習会形式の企画を、10月下旬ごろに東京で、と立案しています。テーマは、外的な基準のない多変量の解析法、数量化理論Ⅲ類を中心とするものを予定しています。

○9月末には「社会調査とプライバジー」の月例シンポジウムも。

住民基本台帳法の改正が行われ社会調査事情が今後どう変化していくのか、個人情報の流通の問題は、などの共同討論です。

いずれも近日中に詳しい案内が出る予定です。御参加を！

会員数（61・7・22現在）

名誉会員	一名
正会員	九九七名
準会員	八三名
賛助会員	三六社

日本学術会議
行動科学研究連絡委員会　主催

シンポジウム
〈行動科学に期待するもの〉

日時　昭和六十一年八月二十八日
木曜日　十三時～十七時半

会場　日本学術会議　大会議室
東京都港区六本木七丁目
（地下鉄千代田線
乃木坂駅下車・西出口）

行動科学研究連絡委員会は、昭和五十九年十一月に新設され、日本学術会議会長から委嘱された八名の委員が、行動科学分野における研究上の諸問題の検討に当っています。登録されている学会は、われわれ日本行動計量学会をはじめとして、学際色豊かな特徴を持っています。それだけに、学会間の緊密な研究交流や意見交換は欠かすことができません。

このたび、同研究連絡委員会では、行動科学関連の諸学会の相互理解と本研究分野の興隆を図るため、右に掲げたようなシンポジウムを開催します。**一般公開、来聴自由**ですので、会員各位をはじめとして、関心のある多数の方々の参加を歓迎する、とのことです。

シンポジウム次第

開会挨拶　内山喜久雄
（行動科研連委員長）

司会　吉田民人・水野欽司
（同研連・委員・幹事）

講演　早坂泰次郎
（日本理論心理学会）

木下冨雄（日本グループダイナミックス学会）

原野広太郎
（日本相談学会）

藤本正雄（日本催眠学会）

久野能弘
（異常行動研究会）

東正（日本行動療法学会）

藤原弘（日本宇宙航空環境医学会）

池見酉次郎
（日本心身医学会）

林知己夫
（日本行動計量学会）

以上が、それぞれ二十分間ずつの講演をしたあと、質疑および自由討論をおこないます。

閉会挨拶　三隅二不二
（同研連・委員）

会員各位の多数の御参加を！

なお、お問合せは、担当委員で当学会員の水野欽司氏（統数研）へ。

日本・中国統計学シンポジウム

日時　昭和六十一年十一月四日から七日間

場所　九州大学（福岡市）

昭和五十九年に北京で催された第1回に続く第2回として、初めて日本で開かれます。日本統計学会後援のもと、中国からは、教育部直属の全国大学研究者をはじめとして四十数名（招待もふくむ）が来日予定です。

シンポジウムの発題テーマとして、行動計量学の広範な領域の話題や方法論をも設定しています。

演題のみの申込み締切・六月末
アブストラクトの締切・八月末

となっていますが、詳しくは左の事務局までお問合せ下さい。

シンポジウム後の招待講演も、数名グループ、個人の規模で可能です。中国側から希望もありますので、どうぞ御検討下さい。御意見、御希望もお知らせ下さい。

〈**連絡先**〉

〒八一二福岡市東区箱崎六丁目十番一号　九州大学　理学部
基礎情報学研究施設
浅野長一郎　または渡辺実智子
事務室（山本、向田）あて

〈予告〉

第2回国際ファジィ・システム学会

期間　昭和六十二年七月
　二十日～二十五日
会場　上智大学（東京・四谷）
主催　IFSA（国際ファジィ・システム学会）日本支部
　計測自動制御学会
会議使用語　英語
参加予定国　英、米、仏、西独、中国、伊、印、ポーランド、チェコ、ソ連、東独、など
参加予定者数　国外　一五〇人
　国内　二五〇人
会議予定　総会のほか、特別講演、招待講演、研究発表など。
　また「工業と経営へのファジィシステムの応用」をテーマにした講習会や、工場見学、レセプションも予定している。
連絡先
・〒一一三東京都文京区本郷一の三五の二八の三〇三　計測自動制御学会事務局　斎藤　保孝
（電〇三―八一四―四一二一）
・〒一五二東京都目黒区大岡山二の十二の一　東京工業大学制御工学科　森田　矢次郎
（電〇三―七二六―一一一一）

〈会員の声〉

感謝

松井　賢二

最近私の頭から離れない言葉がある。とても大切ではあるが、平凡な日常生活ではとかく忘れられがちな「感謝」という言葉である。
「感謝」とは、「ありがたく感じて謝意を表すること」（広辞苑）である。
それでは、私たちにとって何がありがたいことなのか。それは、この世に生を受けたことである。だから、当然のことながら、改めて両親に感謝せずにはいられない。さらには、今もなおこの生が持続していることである。言い換えれば、大病に患わされずに、また昨今の交通戦争といわれる大都会の危険な生活の中で、この身に振りかかるかもしれない災難を受けずに、無事に過ごしてこられたことは非常にありがたいことである。例えば、路地から飛び出して来た車が目の前を通り過ぎたとき、もしも早足で歩いていたら運悪く衝突していたかも……と想像して、鳥肌が立つこともまれではない。私は、常に積極的に生きようとしているのではあるが、こう考えてみると、日々生かされているんだなあ、と最近思えてきた。
夜床に入り、朝目が覚める。以前は、このことを当り前のことと考えていた。また、毎日元気に大学に行き、授業を受けられることも当然のことと考えていた。その頃はそれらのことに感謝することを考えてもみなかった。
しかし、こうして生かされていることがありがたいと思えるようになった今、一日一日が新鮮に感じられると同時に、一日たりとも無駄にしてはならない、とつくづく思うのである。
周囲の先生方のご指導を頂きながら、自分の好きな研究ができる今、少しでも、世のため、人のために役立つ研究をすることが、私のできる感謝の一つなのである。

（立教大学社会学部助手）

〈会報係より〉

○本号の編集作業は、いつも以上に難行しました。遅らせてしまいましたことを深くおわび申上げます。
○日ごろ、数字や機械とつきあっていると、いろいろな言葉を忘れがちです。「感謝」もその一つでしょう。そういう方面も含めて「会員の声」の御投稿を。

学会誌バックナンバー購入のご案内

ご希望の巻・号名、冊数、および送金先・氏名を明記し、代金と送料を左記あてに郵便振替でお送り下さい。
◇請求先　〒一七一
東京都豊島区西池袋三丁目
立教大学社会学部岡太研究室内
行動計量学会事務局　岡太彬訓
◇振替
番　号　東京八―一四八〇五六
加入者　日本行動計量学会
◇和文誌『行動計量学』
1巻1号　（八百円）
2巻1・2号　（各七百円）
3巻1・2号　（各千円）
4巻1号　（千五百円）
4巻2号、5巻1・2号　（各千七百円）
6巻1号　（千二百円）
6巻2号　（二千円）
7巻～13巻の1・2号、　（各二千円）
◇欧文誌 "Behaviormetrika"
No.1～19　（各二千円）
◇送料
一冊　二百四十円
三冊まで　三百五十円